

## 郭熙「怪石平遠様」一試論 —伝李成《喬松平遠図》を手がかりに—

汪文磊（同志社大学）

北宋後半の画史画論には「小景」の用語が散見されるようになる。1950年代、米澤嘉圃氏は伝趙令穰筆《秋塘図》（大和文華館蔵）を小景画と結びつけ、一般的には名山大川ならざる卑近な景色を描いた、小画面の絵が小景画であると定義づけている。それ以来、小景画のイメージが定着し、《秋塘図》も小景画の典型例とされている。

一方、郭熙の山水画論『林泉高致集』「山水訓」には「山水を画くに体あり、鋪舒して宏図をつくれども余りなく、消縮して小景をつくれども少かず」とあり、「画題」には「怪石平遠、平遠を松石の傍に作り、松石は大なるを要し、平遠は小なるを要す。これ小景なり。松石濺撲、濺撲を松石の辺に作り、松石は凝重なるを要し、濺撲は飛動なるを要す。これ小景なり、おおむね浅深高下を分別するなり」（中国国家図書館蔵明抄本）と、小景画の具体例「怪石平遠」と「松石濺撲」が取り上げられている。近年、Ping Foong氏は、郭熙が大観様式だけではなく趙令穰と同様に私的な小画面の作品も制作したことを論証し、《樹色平遠図》（メトロポリタン美術館蔵）を郭熙小景画の具体例とし、郭熙の小景画が小画面の巻物であると考えている。一方、李慧漱氏は「大画面障壁画説」を立て、《喬松平遠図》（澄懷堂美術館蔵）の画題が『林泉高致集』「怪石平遠」の条の記述と一致し、郭熙が生涯にわたって大画面の障壁画を制作し続けた点で、郭熙による小景画が大画面の障壁画であり、《喬松平遠図》が「怪石平遠」の典型例だと主張している。このように、郭熙小景画の実寸、その造形的特徴や小景画の典型とされる趙令穰系作品との関わりは、はっきりつかめているとは言い難い。

そこで本発表では、先行研究を踏まえ、『林泉高致集』における「小景」の記述から郭熙小景画の具体像を考え、伝李成作品として通行する《喬松平遠図》を郭熙系作品と見なしてよいのか、そして郭熙小景画の実寸問題および趙令穰系作品との関わりについて検討する。

考察の順序としては、まず《喬松平遠図》の造形的特徴を『林泉高致集』「怪石平遠」の記述と対照し、本図と郭熙小景画の関係を確認する。その上、裏付けとなる周季常筆《五百羅漢図》（大徳寺蔵）や伝顧閔中筆《韓熙載夜宴図》（北京・故宮博物院蔵）における画中画を手掛かりにし、郭熙小景画の実寸問題を考える。また《喬松平遠図》と《秋塘図》の画面構成における共通項から小景画の系譜問題を検討する。おわりに、《喬松平遠図》は郭熙「怪石平遠様」の貴重な現存例であり、寸法に拘らず松石の画題とクローズアップ的な画面構成をもつのがその造形上の特色であり、その伝統は後に趙令穰の北宋末期の小景画の伝統と融合することになると結論づける。また松石濺撲に関しては別稿で検討したい。